

読書に関するエッセー入賞作品集 2023

祝 現・四日市市立図書館
50周年記念テーマ

テーマ 「図書館が出会わせてくれたもの」
または、あなたの読書法・読書論について

《小学生の部》最優秀賞

百人一首との再会

常磐西小学校 六年

叶 優 梨

三年前の冬のことだった。兄の部屋から、独り言のような声が聞こえてきた。ドアに耳をあててみるとうつつすらこんな声が聞こえた。

「花さそう 嵐の庭の 雪ならで」
なんだ俳句か。と思っていると、続けて、

「ふりゆくものは わが身なりけり」

ん？ 俳句にしては長いな。すると、また同じようなリズムが聞こえてきた。

「来ぬ人を 松帆の浦の 夕なぎに 焼くや藻塩の 身もこがれつつ」

私は、ノックも忘れてドアを開けた。

「ねえ、お兄ちゃん、それ何？」
「ん？ 聞いてとったん？ これは百人一首やで。今度、学校で百人一首大会があるでな。」

「大会？ わあ、いつか出たい。その本貸して。」

目を輝かせている私を見て、兄はCDをかけてくれた。

「秋の～田の～かりほの～庵の～
～苦をあらみ」

何とのんびりした歌声。まるで、遠い昔にタイムスリップしたか

のようだ。私は、CDのまねをして歌ってみた。

「わが～衣手は～露に～ぬれ～
つつ～」

「うまいな。優梨、才能あるわ。」
「えっ？」

めったにほめない兄が、ほめてくれた。これが、百人一首との出会いだった。

あれから三年。今、私は市立図書館にいる。手にしているのは『まんがでわかる百人一首』。百人一首か。なつかしいなあ。

なんてかわいい本。表紙には自分の高そうな五人。背景は桜。わくわくしながらページをめくった。各々の和歌の意味がまんがで描かれている。私は、館内の小さな椅子に座って一気に読んだ。

私が気に入ったのはこの歌。
「高砂の 尾上の桜 咲きにけり
外山の霞 立たずもあらなむ」

遠くに見える高い山の桜、手前には、人里近くにただよう霞。まるで絵画のような歌だ。景色がそのまま絵のようにイメージできる。

次にもう一首。これがまたおもしろい。

「大江山 いく野の道の 遠ければ
まだふみも見ず 天の橋立」
この歌は、作者小式部内侍が、あまりの歌の上手さに、「すぐれた歌人である母親が作っているのでは？」と疑いを持たれ、藤原定頼に「丹後にいる母上に代作はお願いしましたか？」と、からかわれたときに詠んだ歌だ。その場で、三つの歌枕と二つの掛詞を使い、みごとに詠み、自身の才能を明らかにしたという。この歌を見た時、二人のかけひきがおもしろくて、一

《小学生の部》優秀賞

一〇〇円のねうち

桜台小学校 一年

谷 口 楓 真

ぼくは、二しゅうかんに一どとしようかんにいきます。この『一〇〇円たんけん』という本も、さいしよはとしようかんで見つけました。

はじめにこの本を見たとき、ぼくは、お金がでてくるはなしなんだと思いました。ぼくは、まだじぶんがかいものをしたことがないし、お金のことはしゅるいくらいしかしらないけど、よむのがたのしみで、いえにかえってからさっそくよみはじめ

人で笑ってしまった。まるで、学校での出来事のように、何度読み返してもおもしろい。今も昔も、人の思うことは変わらないなあ、と思える歌の一つだ。こんなにもおもしろい古くて新しい百人一首。ぜひ、クラスの皆に広げてみたい。何だか明日が楽しみなってきた。

『No.1ときめき 読み解き古典まんがでわかる百人一首』（谷知子、日本文芸社、二〇二二）



ました。
『一〇〇円たんけん』には、「ぼく」と「おかあさん」がでてきます。二人はかいものをしていきます。「ぼく」は、お手つだいをしたからコンビニでおかしを一〇〇円分かってもらいました。そのあと「おかあさん」がおふろのスポンジをかいに一〇〇円ショップにいきました。
どれもおなじ一〇〇円だけど、みんな、ほしいものがそのねだんに見合っているかどうか

をかながえながらかいものをして
います。しかもむかしは、と
りかえてもいいなと思うもの
を見せ合って、ぶつぶつこうかん
をしていたそうです。お金がは
つめいされて、ものどうしを見
せ合わなくても、おみせでお金
とこうかんすればほしいものが
かえるようになったのです。

「ぼく」と「おかあさん」は、
一〇〇円がなにとこうかんでき
るかしらべるたんけんに出かけ
ました。

二人がいろんなおみせにいく
中でぼくがきになったところは、
肉やさんで一〇〇円ぶんの
肉をはかりうりしてもらったと
ころです。おなじねだんなのに、
ぶた肉と牛肉ではかえるりよう
がちがったからです。牛肉のほ
うがすくないのを見て、ぼくは
どうしてだろうと思いました。
牛のほうそだてるのに時間が
かかるからかなとかんがえまし
た。

ほかにも、「おかあさん」が
一〇〇円でたからくじをいま
いかったところもきになりま
した。もしもくじがあたれば、
一〇〇円が七百七十七まん円に
へんしんするからです。ぼくは、
一まいのかみがちがうねだんの
お金にかわることがふしぎだな
と思いました。

この本をよんで、ぼくは
一〇〇円のねうちをかながえま
した。おなじねだんでも、人に
よってや、ときによって、うれ
しいかどうかかわるのだと思

いました。

ぼくもこの本のように一〇〇
円たんけんをやってみたくなり
ました。こんど、おとうさんや
おかあさんとかいものについて
ときは、一〇〇円でかえるもの
をさがしてみようと思いまし

《小学生の部》優秀賞

『給食室のいちにち』を読んで

浜田小学校 三年

鮫島 誠 法

ぼくは、きゅう食の時間がす
きです。

「今日のきゅう食、何かな？」
と、毎日楽しみに、こん立て表
を見に行きます。

ぼくのすきなきゅう食ナン
バーワンは、カレーライスです。
ぼくは野さいがあまりすきでは
ないのですが、きゅう食でる
野さいは、食べられてしまうの
で、とてもふしぎです。どうし
てあんなにおいしいのかなあ
と、いつも思っていたので、『給
食室のいちにち』という本をす
ぐ読みたいと思いました。

ぼくたちに、安全で、あんな
にもおいしいきゅう食をとどけ
るために、たくさんの方が、こ
んなに多い手じゅんや工てい
ふんでいることがわかり、とて

た。そして、せつかくかうのな
ら、じぶんがまんぞくするもの
をかいたいなと思いました。

『二〇〇円たんけん』（中川ひろ
たか、くもん出版、二〇一六）

も感動しました。

またみんなの食べぐ合でこん
立てを考えたたり、けつせきした
子の数を調べて、食べのこしが
なくなるようにほかのクラスに
ふり分けたりしていて、すごい
なあと思いました。

ぼくがこの本を読んでいる
と、おばあちゃんが、

「今の子どもたちは、こんな
にたくさんのおいしいきゅう食が食べら
れていいわね。」
と言いました。ぼくのおばあ

ちゃん、せん後はじめての学
校きゅうしよくを食べて育った
そうです。おばあちゃんはきゅ
う食といったら、かたいコッペ
パンと、くさくてまずいだし
ふんにゅうの思い出しかないそ

うです。ごはんもなかったそう
です。

「えいようのことしか考えら
れていなかったんじゃないか
なあ。」とおばあちゃんは言っ
ていました。そして食きはアル
ミできていたそうです。

お母さんのときは、食きはま
だアルミで、食べるときにス
プーンがあたるカシャカシャ
た音が苦手だったそうです。そ
して、おばあちゃんよりはよ
かったけど、今のようにおいし
そうなメニューばかりではな
かったそうで、がまんして食べ
ていた記おくがあるそうです。
ぼくはきらいな野さいでも食べ
られるので、きゅう食は進かし
ていると感じました。

ぼくはこの本を読んで、えい
ようしという仕事をはじめて知
りました。国語じてんの引き方
を習ったばかりなので、さっそ
く調べてみました。

「栄養士」学校やびよういん
などで、えいようについて
のしどうをする人。
と書いてありました。

お母さんがそのしかくは国家
しかくといつて、国のむずかし
いテストに合かくしなといけ
ないことを教えてくれました。
そんな食物プロの先生たちが、
ぼくたちのせい長を考えて、え
いようのバランスがよく、食べ
やすく、おいしいきゅう食を
考えてくれていることがわか
り、安心しました。

ぼくが毎日楽しみにしている
きゅう食が、えいようの先生
や、たくさんのおいしい理いんさ
んたちの思いがたまっているか
ら、こんなにおいしいことがわ
かり、これからも感しやして、
いただきたいと思います。

『給食室のいちにち』（大塚菜生、
少年写真新聞社、二〇二二）

《小学生の部》優秀賞

飼育員とみんなの力

大谷台小学校 五年

古市 湊 大

ぼくは魚が好きです。ぼくは、
水族館の飼育員になるのが夢で
した。ぼくは一度、沖繩美ら海

水族館に行ったことがありま
す。そこでイルカショーを見ま
した。そのショーではイルカが

三頭登場しました。イルカたちは飼育員さんの合図にしたがって輪をくぐったりボールをタッチしたり、大きくジャンプしたり、プールの中をイキイキと動き回っていました。上手に技が出来るごほうびに魚を飼育員さんにもらってうれしそうでした。ほくも飼育員さんになってイルカとショーをやってみたいと思いました。そんなことを考えていたときに図書館で出会ったのがこの『しっぽをなくしたイルカ』でした。ほくは夢中になって読みすすめました。

これはミナミバンドウイルカのフジのお話です。二〇〇二年十月十六日、フジの尾びれの先が白くなっていました。壊死していたのです。そして次の日、尾びれの白いところは広がってしまいました。次の日もどんどん尾びれはひどくなり、嘉陽先生は言いました。

「フジの尾びれは切除しよう」と切除した次の日、治ったかと思いきや治りませんでした。そして鴨川シーワールドの勝俣獣医に相談します。しかし切り落としても壊死は止まりませんでした。植田さんはあきらめませんでした。

「もういっちょ、フジの尾びれの、切除手術をします。」と言いました。そして切り落としました。十一月七日、フジが発病してから三週間がたっていました。今日もフジの尾びれを切りました。そして次の日、フ

ジは泳ぎませんでした。白い部分はなくなっていました。尾びれをたくさん切ったせいで、泳げないのです。だからさらに植田さんは提案しました。

「フジの尾びれをつくってもわかないか？」
他の飼育員は

「人工尾びれがあつたらまた泳げますよね。」

と言いました。そして人工尾びれなどを作るブリヂストンにたのんだのです。協力してくれることになりました。そしてフジに合う人工尾びれを作ってもらいました。作ってもらったものがとどきさっそくつけました。結果は大成功でした。フジが泳ぎました。泳げたのですが、少し型が大きかったので、また新たにフジにぴったりなカウリング型という尾びれをつけまし

《中学生の部》最優秀賞

図書館の神様

四日市メリノール学院中学校 三年

井 高 友里菜

私は、図書館が大好きだ。図書館の扉を開けた瞬間、図書館ならではの香りと静寂が私を包んでくれる。ぎゅっしり並べられた本棚の間に入れば、視界は本

た。これなら泳ぐことができました。でも、イルカの訓練をしていたところ、カウリング型の尾びれがわれてしまいます。今度は強度を上げたカウリング型の人工尾びれを使用。そうしたら、ジャンプもできるようになりました。そして人工尾びれを外す日をむかえました。何と、フジは泳げたのです。古網さんは喜びました。古網さんは飼育員のみならずフジに「ありがとう」と言いました。

ほくは水族館の飼育員になるのが夢です。もしなれたら、イルカや他の生き物たちがフジのようなことになった時、他の飼育員と協力して助けてあげたいと思いました。

『しっぽをなくしたイルカ』(岩貞のみこ、講談社、二〇〇七)

て、違う世界の住人になるのだ。これほど本が好きなら私だが、実は今まで私は恋愛小説しか読んでいなかった。男の子と女の子の二人の間の優しい世界が、自分には身近でわかりやすかったからだ。それに比べて、いわゆる「小説」特に「ミステリー小説」というものは、私には難しく理解できないものだと思

れず、授業が始まる度、本を開けるのがつらかった。物語からは、今まで感じたことのない雰囲気や伝わってきた。犯人探しに没頭する主人公と共に、自分も気づかぬうちに犯人を推理考察していた。読み終わるのに時間がかかったが、今までに味わったことのない圧倒的な読後感と犯人が分かった時の爽快感を得、そして何よりミステリーを通して垣間見える現代社会の問題や複雑な人間関係などの大きな学びを得た気分だった。この読書体験に衝撃を受けた私は、今までこのジャンルを遠ざけてきたことに大きな後悔の念を覚えたのだ。こうして私の世界の見つめ方は大きく変わり、より読書が大好きになった。

ある時、地元の本屋で一冊の本が目にとまった。本の帯には「二〇二二年本屋大賞ノミネート」とあり、タイトルも特徴的で気になった。手に取って見たが、ジャンルが「ミステリー」だったため、そのまま本棚に本を返し帰ってしまったのだ。しかし、家に帰ってから、私はそのミステリー小説を忘れられなかった。スマホで題名を検索し、あらずじやレビューを調べた。その本を読んでみたいという気持ちが大さくなり、後日もう一度本屋に行ったのだが、その本には会えなかった。がっかりした私がいつものように図書館を訪れると、私がどうしても読みたいと思っていたその本があるではないか。この偶然の出会いに、私は心から図書館に感謝した。図書館には本との運命的な出会いをくれる神様がいて、私は思う。神様が出会わせてくれた本を借りて早速読み始めた。すると私はみるみるうちにその物語の世界にのめりこんでいった。ページをめくる手が止めら

『六人の嘘つきな大学生』(浅倉秋成、KADOKAWA、二〇二一)

《中学生の部》優秀賞

ゾロリにかいけつしてもらった

僕の苦手

港中学校 三年

川田 琥太郎

僕は小さい頃から本が好きだ。お母さんが元々本好きで、家にたくさん本の絵本や本があり、図書館にもよく連れていかれてもらっていた。図書館では、お母さんと貸出券の上限の二十冊の絵本を借りて重いかばんを引きずるように持ってかえったりもした。ただそのころ僕は、読書が好きだったかというとうではなかった。

小学生になった僕は、『11ぴきのねこ』や、『ねこざかな』などの絵本や、『ミッケ』などの探し絵の本、当時好きだったお化けや妖怪、食虫植物の図鑑などをよく借りたりしていて、なかなか読み物の本には興味がわかかった。

そんなとき、友だちにすすめられて、初めて『かいけつゾロリ』を学校の図書室で借りて読んでみた。『かいけつゾロリ』は、いたずらの王者を目指すゾロリが双子の弟子イシシ、ノシシと繰り広げるいたずらと冒険の物語だ。僕は、このゾロリのしつかりと作り込まれたストーリーと、迷路や探し絵の仕掛けなどがとても面白く感じて、みるみるうちにゾロリの魅力に引き込まれた。ゾロリはシリーズの冊数がとても多く、図書館に行くたびにまず最初に、ゾロリの置いてある棚や、今日返ってきた本のコーナーを見て、「新しく入った本はないか。」や「この前読めなかった本はあるか。」を確認することが僕の習慣になっていった。僕のゾロリ好きは、小学校低学年からしばらく続くことになる。図書の時間のある低学年の間はほぼゾロリを借りていたし、高学年になって図書委員になったときも、ゾロリの棚は必ず確認していた。ゾロリ以外の読み物を読みたい、読まなくてはなあと思っただけのもの、なかなか興味を持てる本を見つけることはできなかった。

小学六年のある日、図書館に行つていつものようにゾロリのコーナーを見ていたら、隣の棚にあった『ラストサバイバル』という本が目にとまった。当時『科学漫画サバイバルシリーズ』も好きだったので、サバイバルという言葉が印象に残ったのかもしれない。手にとつて見ると、表紙もとても面白そうだったので

で借りることにした。『ラストサバイバル』は五十人の小学生が最後の1人になるまで、一つの競技で戦う物語だ。僕はこの本の個性豊かな登場人物や、普通の生活では体験できない非日常的なストーリーにひきこまれた。この本のおかげで文字が多い本への苦手意識がなくなり、本を読むことを楽しいと思うようになっていった。



最近では受験生ということもあり、なかなか図書館へ行く機会や本を読む時間が減っているが、本を読むことが好きなことは変わらず、学校の朝読みの時間は好きなアニメの小説などを読んでたりして、自分なりの読書の時間を楽しんでいる。お母さんから、新しい図書館の建設計画があると聞いた。今からどんな図書館になるのか楽しみだ。新しい図書館ができたらず、ゾロリの棚を見に行こうと思う。

『かいけつゾロリのドラゴンた いじ』（原ゆたか、ポプラ社、一九八七）
『ラストサバイバル』（大久保開、集英社、二〇一七）

《中学生の部》優秀賞

読書

港中学校 三年

海野 一陽

読書を楽しむ、というのは、意外と難しいことであることに、最近、今更ながら気がつきました。別に、「読書をするのには時間や、場合によってはお金がかかる。読書はめくまれた環境じゃないと出来ないから、難しいよね」みたいな話があったのではありません。自分が語りたいたいの、もっと単純な話。それは、「文字を読む速さ」です。このエッセーを書くにあたり、一度、自分が「初めて本を読んだ時の自分」と、「今の自分」を比べ、どこがどう変化したのかを考えました。そして、一番はじめに気がついたのは先刻言った本を読む速さ。本、それこそ一冊が三〇〇から四〇〇、ものによっては一〇〇〇ページあるようなものを七歳の頃に読み始めて、今年で約八年経とうとしていて。人には慣れというものがあるわけですから、当然、七歳の頃と比べて、本を読む速さはそこそこ上がっているはずなんです。これは本にのつている知識・情報を得る効率が上がった、と、捉えることが出来ます。しかし、本をただ「楽しむ」、こ

の一点から見た時、本を読む速さが上がったことはあまり喜ぶべきではないように思います。七歳の頃、小学校で挿んだ本の名前は、『ゲド戦記』。ゲド戦記のページ目を開くと、文字ではなくゲド戦記における「世界地図」のようなものが、最初に目に入りました。それからページを何枚も何枚もめくつていきます。その時の自分には分からない漢字や表現がいくつも出てきました。その度、前後の文から読みや意味という「知識」と、登場人物への理解が深まり、「楽しさ」につながる。しかも、一回一回立ち止まって考えるので、情景について考える時間が多くなり、文字という情報が情報で終わらず、また「楽しさ」に変換されます。

では、今の自分はどうか。知識を吸収するのは速くなったし、分からない漢字や文字なんてほとんどありません。ですが、それだけです。スラスラと読めるようになってしまった分、情報が楽しさに変換されず、情報として完結してしまふ。これは

読書の経験を重ねたことが原因なので、仕方の無いことといえはそれまでです。でも、もし本を楽しむのであれば、一度立ち

止まって、いつもよりも、ずっと、ゆっくり読むべきだと思いましたが。まあ、それが難しいのだけれど。

しかし、ゲームでも十分楽しんだが、できる時間が限られているというデメリットもあり最終的には「想像」という形に落ち着いた。

案外「想像」というのは大いに私の助けになってくれた。例えば怒られた時や嫌なことがあったとき、『赤毛のアン』の世界を想像すると気持ちが楽になった。「ああ、あの丘に登ったらどんな景色が見えるだろうか、あの果樹にどっさり実ったりんごはどんな味がするだろうか」と想像しているうちに嫌な気持ちはスルスルと消え、残るのは「素敵」に満たされた私の心だった。

《中学生の部》優秀賞

赤毛のアン

高田中学校 一年

竹内乙華

まず、表紙が素敵だ。『赤毛のアン』のことである。図書館で一目見た時、即手に取った。その感覚は一目惚れに近く、おそらく表紙を見た時から、「この本を読む」と決めていたのだと思う。

『赤毛のアン』は誰もが知る名作であり、私も幼いころに読んでいたことがある。その頃は小さい子向けに書かれた絵本のような本だったからか、特に感激は受けなかった。しかし、再度原作通りに和訳された大人向けのものを読んでもみると、アンのおしゃべりのユニークさ、何より十九世紀終わりのクラシックな感じにたまらなく魅了された。始めに表紙が素敵だと言ったが、まったくその通りであり、文章表現も素敵であった。そして、その世界に私はのめりこんでいった。

のめりこんだ余り、私は「自分の周りにもこのような世界観を作れるのではあるまいか」と考えるようになった。そんな私が一番最初に手を付けたのは園芸である。

元々祖母が園芸好きで、祖母宅の庭の一角を貰えることになった。品種は覚えていないが三、四種植えた。しかし、庭の一角で赤毛のアンの世界を表現できるはずもなく、結局三日坊主のような結果になってしまった。

そして次に手を出したのは、マイクラフトというゲームだった。マイクラフトとは、ブロックで好きな建物を造ることもできるオンラインゲームのことだ。そこで完全再現とまではいかないが、自分なりに再現してみた。その結果にかなり満足し、親や姉に自慢しまくった。

なるかもしれない。そして前と違う何かを感じ取れるかもしれない。今日寝る前に少し読んでみよう。

『赤毛のアン』（L・M・モンゴメリ、文藝春秋、二〇一九）

《一般成人の部》最優秀賞

図書館が出会わせてくれた二人

森方人

「パパー 夏休みの宿題一緒にしよ？」 蝉の鳴き声がまだまだ盛んな8月の初め。遅い朝食時、優しく甘える娘の一声に、私はいつもやられる。（また今年もその時期が来たか。）よくある夏休みの一風景ではある。我が家でも当然のことながらその光景は繰り返される。自由研究である。（今年は、何をテーマにしようかなあ。）そんなことを考えながら食事を終え、テーマについて考えていた。これは令和4年のお話です。

テーマは、四日市公害で決定だ。なんせ四日市公害訴訟から50年ということで、博物館でも特設展示が行われている。しかし、私は生まれてから40年以上四日市に住み続けているにも関わらず、四日市公害について断片的な知識やニュースしか知らない。どうしようか。ただ、知

識は今からでも得ることができ。知識を得るなら図書館だ。自由研究といえは図書館だ。まず図書館に行こう。さらには地域のことなら地域の図書館だ。善は急げと図書館に向かい、市立図書館二階の地域資料室への階段を駆け上がった。

私は、係の人に相談しながら、その場で四日市公害に関する本を俯瞰し、関連本を10冊ほど借りた。家に帰り一通り読み終えた。本を読んで私は自分の街について知らないことが多すぎたことを恥じた。恥じながらもその10冊のほとんどに名前が出ていた二人のことを発見した。野田の一さんと澤井余志郎さんだ。私は彼らの活動や思いを写真や文章からひしひしと感じ取った。これだから本はすごい。その時の感情が時空を超えて語り継がれる。私はこの二人に会



いた気持ちがあつふつと湧いてきた。と同時に、予感を感じていた。遅かったのではないのかと。資料の年代も古い。今の消息を調べるのが怖かった。そのため、敢えて現時点での生死について調べなかった。私はその答えを予想していたからだ。その後、自由研究の下調べも終盤に差し掛かった。私は博物館に向かった。そこで、初めて二人に会えた。会えたと言っても映像だ。本では何度も何冊にも出てきて、二人の思いや考え、辛かった当時の気持ちをたくさん感じている。本で出会った人に映像で会えた。そして、私は二人の思いを、辛かった思いを感情のこもった声で聴くことができた。私は二人のことを忘れな

いでいようと思った。あの時、子どもの依頼がなかったら、またその年が四日市公害訴訟50年という節目でなかったら、また

図書館の係の人がいなかったら、私はこの二人には、会えなかった。図書館が地域の資料を残してくれていて本当によかった。感謝したい。

自由研究は、たかが子どもの夏休みの宿題だと思つたら怒られるかもしれない。しかし、私には忘れられない夏になった。そして、自由研究の終わりに墓参りにいった。慰霊碑だった。私はお二人に出会えた気がしました。私はお二人の気持ちを忘れません。どうか安らかに眠り下さい。



《一般成人の部》優秀賞

私の思いを変えてくれた本

渡辺高等学院 一年

平田 結梨

私はよく図書館に行きます。行く理由はさまざまです。あの本がまた読みたくなったから。

本の匂いが好きだから。新しい本が入ったから。こうやってよく図書館に通っている私が今も

貸し出しされていなければ毎回借りる本があります。それは汐見夏衛さんの『夜が明けたら、いちばんに君に会いに行く』です。毎日のように通う図書館で私は素敵な本と出会いました。

私達学生の特に女子はまわりにとけこもうとします。何事もなくすごせるように。普通であるために。私には普通が分かりません。誰がどんなことを普通と言いつたのか私には分かりません。でもみんながみんなに普通であることを望むんです。その枠からずれたり、はみ出ただけで何事もなくすごすという願いは叶わなくなります。この本の主人公、茜は私と似ているんです。いつもニコニコしていて優等生であろうとして、空気を読んで行動して…。それは小学生の時におきたでき事がきっかけでした。茜は正義感が強く悪事は見過ごせないタイプでした。クラスの女子がペンを盗もうとしているのを目撃した茜はクラスの人達が大勢いる中、盗んではダメと注意したのです。注意することはいいのです。でもそれが、クラスの人気者だったこと、みんなの前で注意したこと、盗もうとした人を泣かせてしまったことからクラスで無視をされるようになってしまいました。私もそうでした。悪事は許せないし見過ごせなかったの誰であるうとどこでであろうとダメなものはダメと注意して

いました。でも次第に仲の良い友達以外は私に話しかけなくなりました。それどころか陰口まで言われていたのです。それを知った私は、これは普通じゃないんだと思いました。みんなに嫌われないようにしようと思われたことは全部やってみんながめんどくさいと言おうな事も進んで取り組みました。私が普通であるために。みんなに嫌われないように。でもだんだん苦しくなりました。どうして私が全部ひきうけないといけないのだろう。どうして本当の事を言つてはいけないのだろう。そう思っていた私の考えを変えたのがこの本に出てくるヒーロー青磁でした。青磁は私や茜と正反対で思ったことは口にする。やりたいことを全部やつてのける自由奔放な人でし

《一般成人の部》優秀賞

ありがとう、読書感想文

四日市高等学校 三年

木村 好花

この夏、人生最後の青少年読書感想文コンクールに応募した。小学校四年生から毎夏、読書感想文を書き続けてきた私。九年に渡る感想文との格闘で、

私は自分なりに、「読書感想文を書く意義」を見つけた。読書感想文の規定枚数は、小学生在が三枚、中学生は五枚。一つの本について書くには、苦勞

た。青磁は茜に「嫌われた方がいいじゃん。嫌われない方がいいけれど、人が生きていける。」そう言いました。私はその言葉に腑に落ちました。全員に好かれなくてもいいんだ。普通じゃなくても生きていけるし私の事を分かってくれる人がいつか現れる、そう思うと心が軽くなったのです。

このように、自分の思いや考えを変える本が図書館にはあります。苦しい人、辛い人、私のように生き苦しいと思う世界で生きている人。図書館の本に触れる事によって少しでも心が軽くなる本に出会えると思います。

『夜が明けたら、いちばんに君に会いに行く』（汐見夏衛、スライツ出版、二〇一七）

する枚数だ。実際に私も中高生になると、中々五枚を埋められず、最後のまとめをだらだらと書き連ねたこともあった。もちろん、自らの体験や本との共通点も入れこむ。しかし、それだけでは余白が多分に残ってしまい、「もう書くことないよ。」と困ってしまうのだ。二〇〇〇字を充実した無駄のない内容で埋めるには、どうすればよいのか。行き詰まっていた頃、知人から「本を読んで考えたことを、さらに深く考察し、思考の過程を書いてはどうか」とアドバイスを受けた。感想文の主体を、本の内容や感想、学んだことという表面的な内容ではなく、本を読んで感じたことをとことん突き詰めて得たことや、自分の中の葛藤や迷いにする、ということだ。その夏以来、私は自分の気持ちを書き、悩み、苦しみながら、二〇〇〇字を埋めてきた。本の内容に頼らず、自分の感情や考えで勝負するには勇気が必要であり、時には負の感情を書くことに少し怖さを感じることもある。自分の弱さを露呈させることに、悩むこともある。しかし、自らを解放し書いた感想文には必ず味があるし、書き終えた後、「精一杯書いた」という充実感を得ることができるのだ。

最後の読書感想文を書き終えた今、私が考える「読書感想文の意義」は、「自分という人間を厚くする」ことだ。五枚を書き上げるための内容は、生半かな思考の深さでは生まれない。本のテーマについて、登場人物のセリフについて考え続け、自分との対話を重ね、様々な人の意見を聞きながら、熱をもって一字一字を書いていく。書いている途中で新たなアイデアが生まれ、自分の考えていたことに疑いを持ち、始めから書き直すこともある。悩み抜き、書いては消すことを繰り返し、自分に正面から向き合う。この過程こそが、自分という人間をさらに深掘りし、自分を厚くしていくということなのだ。書き終えた時、この五枚を書き上げた私が、書く前の私から、いかに人間としての面白みを増したかを感じる。その瞬間が、あの疲労感と満足感が、私は大好きなのだ。

初めて読書感想文を書いた時、「本を読んで考える」という作業がとてつもない嫌いだ。本はしみじみと味わっていたらいい、と思っていたからだ。九年後の今、私は、読書感想文を書くために悩む時間が好きだ。普段の読書では、本を読み深く考える時間がないが、感想文のために真剣に考えようと、より深くその本を自分のものにできる気がする。こんなに素晴らしい経験をくれた読書感想文に、五枚という量に、私は感謝している。



《一般成人の部》優秀賞

別れと出会いと市民税

小河夏美

28歳の秋。鵜の森公園のベンチで3年付き合った恋人に別れを告げられた。途方に暮れた。思い描いた人生計画が白紙になった。上司の傲慢で威圧的な

態度に悩まされる日々。元々多くない友人たちは結婚出産マイホームの話で持ちきり。コロナ禍で行動制限は続く。これからどうしよう。ひとりぼっちに

なってしまう。とにかく暇だった。家にいても気が滅入る。気分転換を兼ねて近所を散歩することが増えた。いつもの散歩途中、なんとなく図書館に立ち寄ることにした。何年ぶりだろう。入館時に鳴り響く音が妙に懐かしい。無数に並ぶ本の背表紙。特別扱いされている本はない。人気順やいいねの数もわからない。どの本も平等だった。タイトルをゆっくりとみる。うまく使えないままのアプリをスワイプするよりも、遙かにわくわくした。その中でインパクトのあるタイトルに惹かれ、『コンビニ人間』という本を手にとった。どんな内容の本なのかわからない。

秋風が心地良かった。ローンでコーヒーを買い、久保田公園のベンチで少し読んでみることにした。みるみるうちに本の世界に引き込まれた。おもしろい。ページをめくる手が止まらなかつた。あつという間に時間が過ぎていた。主人公が自分と同じことで生きづらさを感じている。悩んでいる。それだけで救われる。励まされる。恋人に仕事の悩みを相談した時、本当はしつくりきていなかった。意識の高いアドバイスはいらなかつたんだ。求めていたのは共感。途端に心が軽くなった。自分に寄り添ってくれる対象は、人だけじゃない。ひとりを選択するのは怖いけど、悪いことじゃない。

その日から頻りに図書館へ通った。市民税を払って良かったと思つたのは初めてだった。たぐさんの本に出会った。新しい世界が広がる。誰かの頭の中を覗き見するような感覚が楽しい。自分を見つめ直し、反省することも多い。価値観の違いに出会うこともある。その度に堀江貴文の本を読んでいた恋人の姿を思い出す。あの時の彼はその本に共感し、励まされていたのかもしれない。様々な視点で物事を考えられるようになった。

今日も図書館で本を借りた。『店長がバカすぎて』という本を職場で広げるわけにはいかない。ブックカバーにするための適当なチラシを一枚もらった。この作品募集のチラシだった。図書館の本に助けられていることを誰かに伝えたくて、文章を書いてみた。これからも図書館で素敵な作品と出会うため、労働に勤しみ納税に努めようと思う。

『コンビニ人間』(村田沙耶香、文藝春秋、二〇一六)



審査講評

一〇年間の変化と現状

国府 正昭

この選評を書くころとして、ふと思いつく二〇一三年の選考資料を棚から出してきた。その年の応募総数は三三二編で、翌年はこの一〇年間で最も多い三六六編であった。近年は一〇〇編前後で落ち着いているから、当時から見れば実に三分の一に減ったことになる。しかし、細かく見ると、実は一般成人の部の応募数はほとんど変化していない。大きく減っているのが中学生の部で、一〇年前には二〇〇編を軽く超えていたのに、今年はその一〇分の一以下になっている。巷間よく言われるような「活字離れ」の進行が原因なのか、部活だ塾だと中学生自身がかたがた忙しすぎて、先生方が多忙でこういう企画の紹介・指導をする余裕もなくなっているのか……その真の原因は知る由もないが、中学生の時期に落ち着いて本を読み、それについて考えをまとめるという経験が減っているとしたら、それは大いに憂うべき事だと思ふ。

さて一般成人の部だが、娘さんのかわいらしいひとで書き始めて四日市公害へと話題を広げていった森方人さんの作は構想が巧みで、また今年のテーマにも上手く合致していて最優秀とした。高校生は一般成人との比較になるので、作品の背景となる経験の面で当然不利である。しかし、自分の感じてきた「生き苦しさ」が一冊の本の世界に触れることで救われ

れば、さらにもろいものになるのではないかと感じた。

小学生の部では、和歌そのもの織り込みながら『まんがでわかる百人一首』という本の魅力を語った叶優梨さんの作が大変楽しくてすんなり最優秀作に決まった。まだ自分で買物をしたことがない谷口楓真さんが、『一〇〇円たんけん』という本から一〇〇円の値打ちを考えた作は、小学一年生とは思えないくらいよく書けていた。鮫島誠法さんの作は、読

抜き差しならない出会い

高田 晴美

まずは一般成人の部最優秀賞の森方人さん。本の中で出会った、でも故人だから現実ではもう会えない、と残念に思っていたら映像で会えた！そして幕前に……という、故人との出会いに関するぐるぐる巡る旅に、胸に込み上げてくるものがあつた。平田結梨さんの、本の中に分り合える人や救って

くれる人を見つけたという話に、小説の存在意義を再確認。本の中にこそ友がいると昔の人は言ったが、それは現代でも。木村好花さんは、読書感想文を書く意義を自らに問い、読書感想文とのガチンコの格闘を語っていた。その本を読む前と後では自分が別人になっているのが本場の読書だと聞いたことがあるが、こういうことが。小河夏美さんの、至る境地が「市民税を払ってきて良かった」なのかい！とツッコミたくなる、シリアス状況なのにかろみ満載の

んだ本をきっかけに祖母や母親と会話し知識を広げていくさまが読んでいて楽しかった。魚が好きで水族館の飼育員になるのが夢だという古市湊大さんの作品は、イルカに人工尾びれを作るといふ本を夢中になって読んでいる姿が目につかぶようでも微笑ましかつた。

どこかで読んだことあるぞと感じてしまうものではなく、あなたならではの特色が出たユニークな作品、それを来年も待っています。

楽しい読み物。一方で、塚脇恵子さんや園田信子さんの文章には、単にある出来事を回想するのではなく、それが長い人生の底を絶えず流れるものであったことを語る一代記のような読みごたえがあつた。

中学生の部最優秀賞の井高友里菜さんは、入手しそこねて後悔していた本に図書館で出会え、図書館には神様がいてと確信したという話。天の配剤もやってくれ、運命も司る図書館ってやつぱりいい。川田琥太郎さんは、〈本〉は幼い頃から好きだったが〈読書〉は苦手だったが本に苦手を解決してもらったというもの。似て非なる〈本〉と〈読書〉を分けて捉えているところに洞察力あり。海野一陽さんの読書論は、以前は読書スキルが低くてスラスラ読めなかったが、だからこそその楽しさがあった、今はスラスラ読めるようになったからこそ楽しさが減じているかもという分析が興味深かった。子供の頃にしかできない

読書というものは確かにある。竹内乙華さんは、自分の周囲に赤毛のアンの世界を構築しようとする話。私にも覚えがあり、ほほえましく思った。少女の世界観はこうやって自家培養していくものなのだ。

小学生の部最優秀賞は叶優梨さん。いい具合に途中に兄との会話や和歌を挟みつつ、本と百人一首と自分との出会いを語った手練れの文章。うまい。谷口楓真さんは、お金って何だ？物の値打ちって何だ？のワクワクぶりがうまく表現できている。俗っぽくしかお金を認識しなくなった大人としては、懐かしい感触。その年齢だからこそ書けることがある。鮫島誠法さんの文章は、とにかく給食が好き！というのが伝わる。自分の好き！と本のテーマが合致した時の喜びとはこういうこと。古市湊大さんのは、「プロジェクトX」を思わせるような面白さがうまく伝わる本の紹介であつた。仕事はこうありたいものだ。

印象として、特に小学生、中学生の部は、エッセイというよりは読書感想文が多かった。エッセイというからにはより自分に踏み込んだ、本や読書と自分とを絡めた「わたしの話」を語ってもらってもよかつたように思う。

読書に関するエッセイ

入賞作品集 二〇二三

令和五年十二月発行
発行 四日市市教育委員会
編集 四日市市立図書館